NICHIBUNKEN

Japanese Studies around the World 2010
世界の日本研究 2010

発行日　2011 年 3 月 25 日
発行所　国際日本文化研究センター　海外研究交流室
京都市西京区御陵大枝山町 3-2（〒 610-1192）
印刷所　佐川印刷株式会社

世界の日本研究　JAPANESE STUDIES AROUND THE WORLD 2010

日本語で書く——文学創作の喜びと苦しみ

Ecstasy and Agony

The Experiences of Non-Japanese Writers of Japanese Literature

常州大学图书馆
藏书章

郭南燕編
Edited by Nanyan GUO

International Research Center for Japanese Studies
国際日本文化研究センター

©2011 by International Research Center for Japanese Studies

First edition published March 2011
by the International Research Center for Japanese Studies
3-2 Oeyama-cho, Goryo, Nishikyo-ku, Kyoto 610-1192, Japan
Telephone: (075) 335-2222 Fax: (075)335-2091
URL: http://www.nichibun.ac.jp

目　次

序　郭　南燕　5

＜研究発表＞

留学生の日本語による文学創作の意味を考える
——「留学生文学賞」の設立と発展を通して　栖原　暁　9

日本語作家は日本語をいかに異化し、多様化しているのか
——リービ英雄のケース・スタディ　牧野成一　21

楊逸の文学におけるハイブリッド性　谷口幸代　49

日本語日本文化によって広がる想像力と創造性　郭　南燕　63

＜作家座談会＞
田原、シリン・ネザマフィ、ボヤンヒシグ、楊天曦　83

＜総合討論＞
ジェフリー・アングルス、伊藤守幸、稲賀繁美、鈴木貞美、
トゥンマン武井典子、中川成美、細川周平　105

シンポジウム「日本語で書く」への結びにかえて　稲賀繁美　129

附　録

シンポジウムのプログラム　139
シンポジウム関連記事　141
『留学生文学賞委員会報告』（抄）　154

参加者

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

序

母語を使うかどうかは別として、文学創作において、一つの作品を決定づけるのは、表現の主体・表現の対象・表現の媒体という三者間の関係である。この関係をどのように成立させるかは、文学の普遍的、根本的な問題である。

しかし、非母語が表現媒体に選ばれた時、その三者間の関係成立の複雑さがいち早く表面化し、先鋭化する場合がよくある。非母語による文学作品を分析することは、取りも直さず文学創作の本質をあぶり出し、俎上にのせることである。のみならず、非母語文学の受け入れ方も当然研究の視野に入って来る。

「日本語文学」を一つの分野とする研究は、約20年前から始まり、在日朝鮮人の作家、台湾出身の作家、母語日本語を相対化する作家に関する研究が行なわれてきている。「越境者」「越境文学」という言葉はすでに耳新しくないものになっている。

なぜ、非母語の日本語を表現媒体に選び、日本語を理解できる人々（大半が日本人）を読者として想定したのか。その場合、作家は何を表現し、どのように表現したのか。それらの作品は、日本人読者にどのような反応を呼び起こしたのか。そのような反応は、日本社会の何を反映しているのか。「日本語文学」は、日本文学にとって、どのような意味をもつものになっているのか、あるいはなっていくのか。

これらの古くて新しい質問に答えるための試みとして、2010年1月29日、国際日本文化研究センターにおいて、シンポジウム「日本語で書く——文学創作の喜びと苦しみ」を開催した。外国生まれの作家が日本語を用いて創作した近年の文学作品にどのような言語的、文学的、文化的、社会的特徴が現われているのかを検討した。研究発表、作家座談会、総合討論会、と三部に分けられている。

研究発表では、2000年に創設され、外国人留学生の日本語創作の大きな推進力となっている「留学生文学賞」の設立経緯（栖原暁）、日本語文学の

代表的作家リービ英雄の日本語表現の特徴（牧野成一）、芥川賞の受賞者で、日本語を非母語とする楊逸の文体における中国語と日本語のハイブリッド性（谷口幸代）、日本語と日本文化の習得を経験した作家たちの作品に共通する性格（郭南燕）に関する四本の発表があった。

作家座談会では、現在日本の文壇で活躍している詩人田原、小説家シリン・ネザマフィ、随筆家・詩人ボヤンヒシグ、小説家楊天曦がそれぞれの創作経験を披露し、創作過程で味わった喜びと苦しみを教えてくれた。この場でしか聞けない貴重な発言が多くあり、日本語文学を研究する上で重要な参考資料ともなりうる情報を数多く提供してくれた。

総合討論会では、前記の発表者と作家に、文学と文化の研究者であるジェフリー・アングルス、伊藤守幸、稲賀繁美、鈴木貞美、トゥンマン武井典子、中川成美、細川周平の諸氏が加わった。諸氏は、非母語による表現の主体と媒体との摩擦関係、言語の違いを超えた創作の動機、非母語が与える新しい言語感覚と美的効果、作家の心理的境界線の越え方、非母語の使用における制約中の自由度、緻密な作品分析の重要性、母語である日本語の相対化と作家意識の成立、日本語文学の将来性などについて、活発な討論と質疑応答を行なった。

本報告集は、研究発表の原稿と、作家座談会の記録（各自の言語表現をなるべくそのままにとどめる）と、総合討論会の内容をまとめたものである。さらに、本シンポジウムに関するマスメディアの報道の一部分をも附録として収録している。日本語文学の研究の布石の一つになるものと思う。

今回のシンポジウムを契機に、日本語文学への関心が高まり、日本語文学に関する総合的な研究が広く深く展開されていくことを期待している。

郭　南燕

研究発表

留学生の日本語による文学創作の意味を考える
——「留学生文学賞」の設立と発展を通して

栖原　暁

はじめに

作家でも文学者でも言語学者でもない著者が、「留学生文学賞」について語ることについて、些かおこがましさを感じる。賞創設当初はこのような発展を遂げるとは予想せず、毎回送付されてくる作品が少しずつ増え、作品の質が上がってくるのが目に見えるようになって、われわれ主催者の方が逆に留学生の心意気に励まされながら、ここまで続いてきた。結果、1年ごとにいつ止めようかと迷いつつ、また関係者の励ましとご協力に支えられつつ、すでに7回まで来てしまったのである。

私は、1975年より、東京都文京区にあるアジア文化会館で、在日留学生支援の仕事をするようになった。留学生を対象とした宿舎の運営や、相談、支援、交流などを仕事としてきた。1997年、東京大学に着任後も今日に至るまで、留学生相談、支援、交流が主たる仕事であり続けている。

従って、私の「留学生文学賞」とのつながりは、「文学」でも日本語でさえもなく、「留学生」である。本稿では、このような立場から「留学生文学賞」の設立と発展を軸に書き進めたい。

在日留学生の概況

まずは在日留学生の概況を見ておこう。

わが国において「留学生」として認知されるためには、文部科学省の定めにより、以下の二つの条件をみたしていなければならない。

(1) 以下の教育機関に在籍中であること。

1　大学、大学院、短期大学、高等専門学校

2　専修学校の専門課程（専門学校）

3　準備教育課程（一部の日本語教育機関のコース）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

(2)「出入国管理及び難民認定法」が定める在留資格「留学」を有すること[1]

である。

文部科学省資料によると、2009年5月1日現在、13万2千720人の外国人留学生が日本で学んでいる。中曽根元首相時代の1983年に、「留学生十万人計画」が打ち出された。当時は一万人ほどであった留学生数を21世紀初頭までに10万人に増やそうという計画であった。図1に示すごとく、途中減少するなど紆余曲折はあったが、この計画は、2003年に数値上達成された。また図には総数のほかに、3種類の留学生の人数推移が示されているが、国費留学生（文部科学省から奨学金を支給されている留学生）、外国政府派遣留学生（出身国政府の奨学金を受けている留学生）、およびそれ以外私費留学生の数の推移を示した。図を見ればわかる通り、国費留学生は10%に満たず、90%が私費留学生である（文部科学省資料、以下同様）。

またもう一つの大きな特徴は、アジア地域出身の留学生が92.3%と9割以上を占めていることである（図2）。

これを出身国・地域別で見れば、59.6%を占める中国をはじめ、韓国（14.8%）、台湾出身者（4.0%）の上位3カ国・地域を併せると78.4%となる。日本と歴史的・文化的な関わりの深い漢字圏出身の留学生が80%近くにもなっていることが分かる。次にベトナム（2.4%）、マレーシア、タイ（各1.8%）といった東南アジア諸国が並び、欧米諸国では7位に2,230人（1.7%）のアメリカが入っている程度である（表1）。

在学段階で見れば、大学学部生・短大・高専の留学生が約6万7千人で一番多く、全体の約半数を占め、大学院生が四分の一強、残り四分の一が専修学校生（但し専門課程生）や準備教育課程生等である。

さらに、留学生の居住形態をみてみると、学校や公益法人等が設置する宿舎に入居できている留学生は4分の1に満たず、75%以上が民間のアパート等に住んでいる。この面でみると、留学生受け入れは地域社会の協力なくしては、成り立つまい。

1　このほかに民間にある日本語学校で日本語等を学んでいる者については在留資格「就学」が与えられる。財団法人日本語教育振興協会よると、2009年度現在、全国に日本語教育施設は420施設あり、そこで学ぶ「就学生」は4万人を超えている（http://www.nisshin-kyo.org/j147.pdf）。しかし、2009年に「出入国管理及び難民認定法」が改正され（同年7月15日公布）、2010年7月1日をもって、「就学」が廃止され、「留学」に統合されることになっているが、ここで示されている数字は2010年3月末における現行法に従った数字である。

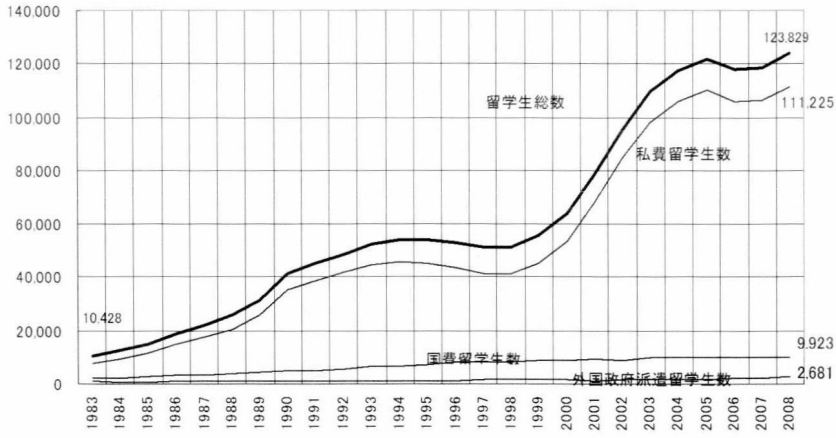

図１　在日留学生数の推移

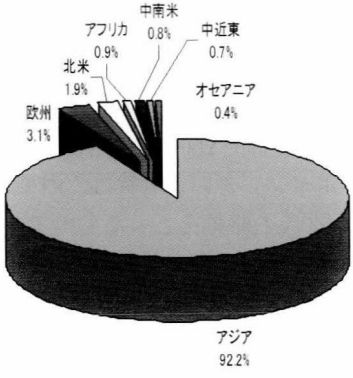

図２　出身地域別留学生比率

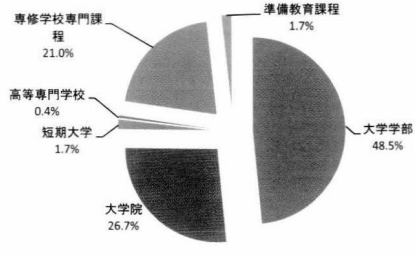

図３　留学生の在籍段階別人数割合

表1　出身国・地域別留学生数と比率（2009.5.1 現在）

国（地域）名	留学生数	構成比
中国	79,082	59.6%
韓国	19,605	14.8%
台湾	5,332	4.0%
ベトナム	3,199	2.4%
マレーシア	2,395	1.8%
タイ	2,360	1.8%
アメリカ	2,230	1.7%
インドネシア	1,996	1.5%
バングラディッシュ	1,683	1.3%
ネパール	1,628	1.2%
その他	13,210	10.0%
総数	132,720	100.0%

（文部科学省資料）

檸檬屋での出会い

さて、留学生文学賞は、当初「ボヤン賞」の名称で2000年に始まった「留学生による日本語文学新人賞」である。「ボヤン」という名称は、内モンゴル出身の中国人留学生であったボヤンヒシグ氏の略称をとったものである。そのボヤンヒシグ氏との出会いが、留学生文学賞の出発点である。

ボヤンヒシグ氏は、1990年代はじめ、中国内モンゴルより私費留学生として来日し、法政大学で現代詩を学んでいた。当時の他の中国人私費留学生の例にもれず、同氏には国からの送金はなく、生活費と授業料は全て自前で賄わねばならなかった。アルバイトと勉学に追われる留学生活を送ってきたため、卒業するまで日本をじっくり観察するいとまもなく過ごしてしまった。やっと卒業するにあたって一年間ほど詩人としてゆっくり日本を見てみたいと考え、先生などに相談するが、なかなか道が見つからない。

出入国管理法では、日本で在留するために厳しい審査がある。大学を卒業した留学生が日本を観察するために1年の滞在を得るのは困難であった。1990年に大きく入管法が改正され、大学で勉学した専門を活かす仕事なら会社に就職することで在留を得ることができるようになった。しかし、ボヤ

ン氏のような目的のために、採用してくれる会社は簡単には現れなかった。

そこで留学中に知り合い、師事していた詩人の荒川洋治氏に相談した。話を聞いた荒川氏が相談のために連れて訪れたのが、学生時代からの友人住枝清隆氏が営んでいた居酒屋「檸檬屋」であった。1999年のことである。当時檸檬屋は、台東区の谷中にあり、そこは作家やジャーナリスト、アーティストなどを常連客とする一風変わった居酒屋だった。

写真1　ボヤンヒシグ『懐情の原形』

檸檬屋の主人や常連客達は、荒川氏からボヤン氏の話を聞いて、「これまでアルバイトと勉学に忙しかった留学生に対し、卒業して用が済んだら帰れということか」と悲憤慷慨し、在留延長のために奔走した。一部の客たちは、ボヤン氏に対して、日本留学中に体験したことや思ったことを日本語で書いてみたらどうかと勧めた。

常連客達の義侠心も手伝い、滞在の継続はなんとか実現できたところに、ボヤン氏が一気に書き上げた原稿を檸檬屋に持参した。これを読んで、その内容の素晴らしさに感動した常連客達は、関係者に呼び掛け、お金を出し合って基金を作り、詩文集『懐情の原形――ナラン（日本）への置き手紙』を西治出版（株）より出版した（写真1）。日本と母国への思いを日本語で綴ったこの作品は、新聞の書評欄、文芸誌などで取り上げられ、高い評価を受けた（写真2『毎日新聞』を参照）。

留学生文学賞の創設

檸檬屋では、日本で学ぶ留学生の中にはこんな素晴らしい作品を書くことができる人材がいるのだから、他にも隠れた優れた人材が多数いるに違いない、留学生に日本語文学作品の創作を奨励して、日本で苦労して勉強している留学生を元気づけようじゃないか、とだれかが言いだし、同調者が集まり、資金を出し合い、この賞ははじまった。だから最初は、ボヤンヒシグの通称名をとり、ボヤン賞と命名されていた。ボヤン氏も出版された本の原稿料を

毎日新聞　（第3種郵便物認可）

2000年6月24日

「留学生の励みに」と話すボヤンヒシグさん

留学生が文学賞創設

「8年間の総決算」で出版した本の印税もとに

モンゴル系中国人のボヤンヒシグさん

日本語学ぶ励みに

日本で8年間日本語と文学を学んだモンゴル系中国人の留学生が「勉強の総決算」として出版した本の印税を基に、自分と同様の外国人留学生を対象にした日本語の文学賞を創設した。内モンゴル自治区出身のボヤンヒシグさん(37)で、賞の名は「ボヤン賞」。在日中に知り合った詩人や作家が協力する。「慣れぬ環境で日本語と格闘する留学生たちの励みになれば」と関係者は期待している。

ボヤンヒシグさんは7月の帰国を前に4月、日本での生活を詩とエッセーでつづった「懐情の扉形」（英治出版刊）を出版した。北京でモンゴル語の詩集も出した詩人で「もっと勉強したい」と来日、東京の日本語学校と法政大大学院に通った。日本語で本を書くに当たっては、師事する詩人の荒川洋治さん(51)と、荒川さんに誘われ常連となった荒川区のスナック「檸檬屋」の仲間の励ましがあった。作家の宮崎学さん(54)らだ。

出版後「本を出せただけでうれしい。印税はいらない」とボヤンヒシグさん。仲間が文学賞創設を提案した。賞は太陽と月をモチーフにした彫刻作品と30万円（1人）。初版の5000部を売り切れば約70万円の印税が見込まれ、これを基金に運営する予定。彫刻の製作は、やはり檸檬屋常連の金工作家、北村鏈さん(54)が実費で引き受け、荒川さんや宮崎さんが審査委員を務める。応募の分野は短編小説、詩などを文学全般。締め切りは11月30日で、年末に第1回受賞者が決まる。問い合わせは檸檬屋(03・3828・2028)。

【長倉　正知】

写真２　書評『毎日新聞』2000年6月24日（読書欄）

まるまるこの賞のために提供すると申し出た。

実は私は、当初この賞にそれほど積極的ではなかった。わたしはそれまで数多くの留学生による日本語に接してきていた。多くは奨学金申請のための作文であったり、大学等に出すレポートであったり、入管局宛の在留延長などの理由書であったりする。それらは、経済支援を得たり、在留許可を得たりするのが目的で作成された文書で、日本人の自尊心をくすぐるような論理

で構成されたものが多い。それらを長年添削してきた経験が身に付き過ぎたせいか、なかなか留学生が、日本語で文学作品を綴るということがイメージしにくく、どれほどのものが集まってくるか実は内心やや怪しんでいた。

しかし、私の予想は見事に外れた。送付されてきた原稿は、表現力に拙さがあるものも含まれていたものの、私がそれまで接してきた留学生の日本語とは根本的に異なるものであった。誰に媚びるでもなく、本心から書きたくて書いた、いわば、日本人が文学作品などを書く時の目線と同じ高さのものであった。

このとき私は、30年近く前にあった、国費外国人留学生受け入れ制度をめぐるある事件を思い出した。その後、機会があり、ある雑誌に留学生文学賞について書くように依頼された拙稿にその事件について触れたことがある。該当部分を引用しよう。[2]

文相に直訴した7人の留学生

先日たまたま留学生支援団体主催の講演会があり、休日でもあったので聴きに出かけた。講演者は旧知の元国費留学生で、卒業後も帰国せず日本に定住している。現在は大学の講師を務める傍ら、地域の外国人支援活動に協力したり、祖国の発展のためにNGOを立ち上げるなど活発に活動を行っている才媛である。日本で小説も数冊書いている。その淀みのない日本語での講演の中で、自身の日本留学時代の進学にまつわる回顧談が出てきた。

彼女が文科省（当時は文部省、以下同じ）招聘の国費留学生として来日したのは1974年のことである。当時日本の大学の学部に入学するために来日した国費留学生は、まず東京外国語大学付属日本語学校（現・東京外国語大学留学生センター）で一年間日本語を集中的に勉強した後、希望の大学に進学した。ところが、その前年から文科省は受け入れの規則を改め、文化系の進学希望者については東京外国語大学に設けられていた「特設日本語科」に入学する道しか用意していなかった。しかもそこは留学生だけが学ぶ特殊な学科であったため、7人の文系志望の留学生達は、他の大学の経済学部や教育学部などの文系学部に入学し、日本人学生と一緒に学びたいと主張したのである。7人の留学生達の強い意志は、アジア文化会館を中心とした関係者のサポートを得て、当時

2 「留学生文学賞の志」財団法人 日本学会事務センター刊 *SCIENTIA* 24号、2002年12月号

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com